

「ゆききの岡」

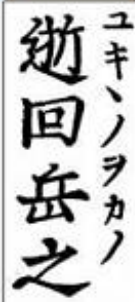
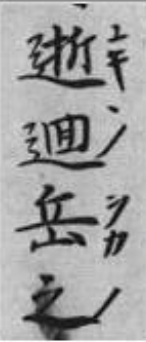
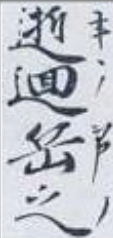
北川 和秀

1、「逝廻丘」

故郷の豊浦寺の尼の私房に宴する歌三首（その一首目）秋雑歌

明日香河逝廻丘の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ（八・一五五七）

右の一首は、丹比真人国人のなり。

寛永版本	広瀬本	類聚古集	紀州本	神宮文庫本	西本願寺
					

訓みは諸本「ゆききの岡」で一致しているが、そうは訓めない。

今日、この三文字は「ゆきみるをか」が定訓となっており、飛鳥川が裾に沿って流れている岡の意で、地名とはされていない。

「ゆききの岡」は万葉歌を誤読した結果生じた、實在しない幻の地名ということになるが、この地名は鎌倉時代以来、近代に至るまで作例があり、その所在地についても岡寺の岡であるとするなど、實在の地名として認識されてきた。

2、鎌倉時代によまれた「ゆききの岡」の例

建永元年仙洞御歌合に、朝草花

我が袖は今朝もほしあへず飛鳥河ゆききの岡の萩の白露

(壬二集2383) 秋部 藤原家隆

右勝

範宗朝臣

秋はなほ時雨れぬ袖も露霜にぬれてゆききの岡のはぎ原

(院四十五番歌合建保三年48)

夏と秋とゆききの岡のよるの雨に萩のふるえは色替りけり (紫禁集944) 順徳院

題しらず

権律師尊海

しろたへのそでかあらぬかたび人のゆききのをかにさけるうの花 (檜葉集627) 饒別

経朝

しるしらずしばしやすらふ旅人のゆききのをかになびく青柳 (宝治百首307) 春廿首

行路萩

藤原親朝

たび人のゆききのをかの秋のいろを袂にみする萩がはなずり (新和歌集173) 秋歌

岡花

左大弁宰相

旅人のたよりにつけて事とはんゆききの岡の花はさくやと

(龜山殿七百首77) 春百三十首

の歌のように「ゆききの岡」に往来の意味を重ねた歌は極めて多い。「ゆききの岡」をよんだ鎌倉時代の歌二十五首の中に、「旅人」を含む歌が八首、「かち人」を含む歌が一首あり、「たどる」や「ふみわけ」とよむ歌が二首みえる。また、歌中に「袖」「たもと」「露」などを含んで、の歌と歌意に共通点のある歌が五首ある。これらの歌における「ゆききの岡」は、いずれも人がそこを通過する岡という扱いであり、「ゆききの岡」という語形がこれらの作に繋がったといえる。

また の歌のように「夏と秋とゆききの岡の」とうたう歌は、夏から秋への季節の移行を「ゆききの岡」と重ね合わせている。

このように、「ゆききの岡」という歌枕は、それがどこにある、どのような地なのかとは無関係に、語形から喚起される往来という意味と重ね合わせてうたわれることがもっぱらであった。それは、この地名が實在の地名ではなく、万葉歌の誤読から生じた幻の地名であることも関わるのであろう。

3、「ゆききの岡」の比定地

和歌の世界では、実際にその地に赴くことなく歌枕をよむことは珍しくなく、特に「ゆききの岡」は、「ゆきき」という語形が意味を持った歌枕であるから、中世の歌人達にとって、「ゆききの岡」が具体的にどの岡を指すのかなどという興味や認識はなかったかもしれない。それでも、歌枕として定着してゆくと、具体的な比定地が生じたようである。中世・近世の文献から参考となるものを挙げる。

念誦^{ねつぎ}嶺^のといふ寺に参り、^{ゆききの}逝回岡^のの観音に参れり。卅三所のうちにて、誠に人の往来^{ゆきき}もしげく見えたり。（『吉野詣記』一月二十九日条）天文二十二年1553

逝回岳八今岡寺アル所トソ（『万葉代匠記』精選本一五五七番歌）元禄三年1690

^{ユキキ}逝回丘^{在岡飛鳥二村間}（『大和志』卷二十四 高市郡「山川」）

逝回岡 同郡（高市郡）、今の岡寺の地なり。然れども元来は岡寺の辺より香久山までのほとりなり。

「ゆききの岡」を岡寺の岡とするものが目立つ。の『吉野詣記』には岡寺という寺名は書かれていないが、著者の三条西公条は多武峰から橘寺に向かう途中に逝回岡の観音に参詣していること、岡寺は西国三十三所の札所の一つで如意輪観音を本尊とすることから、この逝回岡は岡寺に相違ない。「誠に人の往来^{ゆきき}もしげく見えたり」の「誠に」は、「ゆききの岡」というその名の通りに、という意と思われ、鎌倉時代の和歌と同様、ここでもやはり「ゆききの岡」という地名に往来の意を重ね合わせている。

一方、の『大和志』では、「ゆききの岡」は岡村と飛鳥村との間にあるとする。現在の明日香村の大字では、飛鳥寺や万葉文化館は大字飛鳥、万葉文化館のすぐ南の明日香民俗資料館やその南の酒船石は大字岡である。

近代の例はさらに少なく、二例しか見出すことができなかった。

用例の一つ目は明治三十六年の長塚節の短歌である。

橘寺より飛鳥へ行くみちのかたへに^{ゆきき}逝回^の丘といふにのぼりて

たびゝとの^{ゆきき}逝回^の丘の小畠には煙草の花はさきにけるかも（『長塚節名作選』二）

長塚節は明治三十六年八月上旬に奈良・飛鳥を旅行している。この歌はその折の作である。当時、実際にゆききの岡と呼ばれる岡があつて、節はその岡に登って歌をよんでいるわけである。詞書によれば、ゆききの岡は橘寺から飛鳥へ行く道の傍らにあり、短歌では、ゆききの岡には煙草を栽培している小畠があるということになる。

用例の二つ目は、「飛鳥名所」というタイトルの、四枚一組の絵はがきである。そのう

ちの一枚に、「ゆきくの岡より香具山、耳成山を望む」という説明がある。



上の写真は前ページの絵はがき、下の写真は万葉文化館2階の展望台から撮影したもの。
よく似ているが、耳成山と香具山の重なり具合から見ると、絵はがきは万葉文化館より
もわずかに西側から撮影したものと考えられる。





上は昭和三十二年に奈良文化財研究所によって撮影された飛鳥寺およびその南東の岡の写真である。平成三十年四月二十七日から七月一日まで飛鳥資料館で開催された展覧会の図録『あすかの原風景』に掲載されたもので、「飛鳥寺の南東の丘陵 1957年」というタイトルのもと、「丘陵の傾斜地が畑となっています。この丘陵の奥に飛鳥池がありました。現在は奈良県立万葉文化館が建っています。」という解説文がある。「飛鳥寺の南東の丘陵」とはまさに飛鳥寺の瓦窯の岡である。この写真及び解説によっても、当時、瓦窯の岡の西側が畑であったことが知られる。



昭和44年4月



平成23年10月

上に示した二枚の空中写真はいずれも国土地理院のサイトからダウンロードして、必要箇所だけを切り出し、文字を加えたものである。

右側の写真で、万葉文化館のすぐ西隣には森のようなものが見える。ここは岡になつていて、飛鳥寺の瓦を焼いた瓦窯が発掘されている。瓦窯の岡は現在は木が生い茂つていて登ることはできないが、絵はがきはこの瓦窯の岡あたりから撮影したものと考えて良いであろう。ここからならば絵はがきのように飛鳥寺や道路が見えるはずである。

一方、左側の写真では、現在の万葉文化館の位置には飛鳥池がある。そして、そのすぐ西隣の瓦窯の岡は、今と異なり、西沿いの道に面した西側が切り開かれていて耕作地のように見える。こういう状態であれば、そこに登ることは可能であろう。